

ロマンティックな風景： ソールズベリ平原の遺跡とその現在

石倉 和佳

文化環境学大講座

A Romantic Landscape :
The Ancient Remains in Salisbury Plain and Their Present State

Waka ISHIKURA

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo,
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract

This paper explores the historical and cultural dimensions of the ancient remains in Salisbury Plain, Wiltshire, examining Wordsworth's "Salisbury Plain" and Constable's philosophy concerning landscape. There are many prehistoric sites in Salisbury Plain, and Stonehenge is most famous. From the late 17th century, the ancient remains in Salisbury Plain began to draw public interests to create controversies over the remains and British people's cultural origins. About Stonehenge various legends and beliefs have been created, and the lasting belief that it was one of the altars of the Druids influenced what Wordsworth depicted about the place. As one of the legislative centers of the West England, Old Sarum flourished in the 12th century, yet after the church moved to Salisbury (New Sarum) in the 13th century, it became desolate and uninhabited. Constable's "Old Sarum" highlights the romantic landscape image in which the presence of the ruined city with historical importance is crystallized into the minute visual description of light and clouds. With these ancient remains, Avebury, a prehistoric site with stone circles in the north of the Plain, shows the historical process of destruction and preservation of remains. The present states of these remains are also introduced, describing how the National Trust and English Heritage take part in the protection of the environment relating to the remains. Thus to examine these historic sites in Salisbury Plain enables us to consider, with a view to the present age, the cultural layers from which the English romanticism came about and in which its contemporary relevance could be discovered.

イギリス南西部に広がるソールズベリ平原(Salisbury Plain)には、ストーンヘンジ(Stonehenge)をはじめとして、多くの巨石遺跡が残されている。イギリス国内でこれらの遺跡への関心が高まったのは17世紀以降である。科学的調査が行われるようになる20世紀に至るまで、巨石群や古代遺跡にまつわる多くの迷信や伝承が伝えられたが、同時に遺跡への歴史的、文化的関心は、イギリスの民族的起源を探ろうとする古代への想像力とともに展開した。また、遺跡や廃墟のある風景への趣味は、特

に18世紀後半から19世紀にかけてのイギリス絵画や文学に、独特の色彩を添えている。イギリス独自の審美観である「ピクチャレスク」を取り入れた庭園や風景画では、ごつごつした手触りや崩れた形など、廃墟の形象をとり入れることが推奨された。また、古代や中世の人々の生活や信仰と結びついた遺跡は、遠く過ぎ去った過去への想像力を掻き立て、超自然的なイメージへの嗜好を強めることにもなった。

これらの遺跡への関心には、古代や中世に想像力を働

かせ、エキゾチックな文化に惹かれる感受性がみられる。この感受性は、ロマン主義の潮流を形成した一つである。歴史的な意味が充満した場所として巨石群や墳墓や要塞の廃墟を見るとき、その風景は、その場所にまつわる伝承や過去の栄光と悲惨との連想によってさまざまな感情を呼び起こすだろう。そしてそのような風景を前にして呼び覚まされた感情から文学や絵画が作り出されるとき、そこに表現されるのは「ロマンティックな風景」だといえるだろう。‘romantic’という語は、もともと「(中世)ロマンスを思わせる」という意味である。¹ 18世紀から19世紀にかけて、物語の貯蔵庫ともいえる古代や中世の遺跡には、人々の好奇心と想像力を掻きたてる強い喚起力があつたのである。

本稿では、ソールズベリ平原に立つ巨石遺跡のストーンヘンジ、そしてソールズベリの中世時代の城砦跡であるオールド・セラム (Old Sarum) を取り上げ、それらの遺跡の歴史的、文化的背景を考察したい。その中で、ロマン主義時代に活躍し、これらの遺跡や風景に関する作品を残した、詩人のワーズワス (William Wordsworth, 1790-1850) と画家のコンスタブル (John Constable, 1776-1837) の作品について当時の遺跡の状況とともに検討したい。同時に、現在におけるこれら二つの遺跡の現状を紹介する。ロマン主義時代の文学や絵画に現れた遺跡について考察するには、遺跡と作品の双方を歴史的な視野から重層的にとらえる必要があるだろう。同時にそれらの遺跡の現在は、遺跡の場所を中心に、歴史的な深度をもって考察されるべきである。このようにして初めて、ロマン主義時代の古代への関心を、現在も視野にいれた文化的な堆積とともに見ることができるだろう。本稿では最後に、ソールズベリ平原にある巨石遺跡の一つで、ストーン・サークルが残るエーヴベリー (Avebury) についても紹介したい。

ストーンヘンジ (Stonehenge) とワーズワス

ストーン・ヘンジとは、「ストーン」(stone)に、一般的に環状の遺跡を指す「ヘンジ」(henge) がついた言葉で、古くから固有名詞として定着したものである。² 「石で作られた環状遺跡」の意であるが、イギリスにはそのような遺跡は多く残っており、この遺跡が特にこの名で呼ばれるようになったのは、代表的な遺跡として古くから人に知られていたからであろう。この名から推測できるのは、この遺跡が文字文化を持たない人々によって残され、その由来について何一つ直接的な文書が残されていないことである。ストーンヘンジに関する記述を残した建築家のイニゴ・ジョーンズ (Inigo Jones, 1573-

1652) は、「野蛮にも石のヘンジと呼ばれている」(“vulgarly called stone henge”) と書いたが、この名が野蛮であると感じられるのは、何らかの文化集団によってつけられた固有名とは考えにくいからであろう。

ストーンヘンジについての言及のある文献のうち、もっとも古いものの一つに、12世紀のジェフリー・オブ・モンマス (Geoffrey of Monmouth) による記述がある。ジェフリーによれば、ストーンヘンジはアーサー王の伯父アウレリウスの命令で、預言者 (魔法使い) マーリン (Merlin) によって、戦闘で死んだサクソン人兵士を弔うために建てられたということである。マーリンはその魔力で、石をアイルランドのキラルス山 (Mount Killarus) から運んできた。³ この伝承は、巨石とアーサー王伝説とを結ぶものであり、サクソン人の侵入に対抗した先住のブリトン人への連想を強めるものであったと考えられる。時代が下ると、ストーンヘンジは一般にケルト人と言われる人々の文化や、ケルトの祭祀集団として記憶されてきたドルイド教の人々 (Druids) の祭壇として考えられるようになる。



写真1 円形に配置された石柱とその上に渡された横石はもっとも後期に建てられたもの。(筆者撮影)

イニゴ・ジョーンズによれば、17世紀半ばには、すでにストーンヘンジはドルイドの人々が建てたという伝承があつた (Jones, 2-3参照)。ジョーンズは、ドルイドの人々には建築技術がなく、この巨石建築はローマ人の作ったものであるという説を展開した。⁴ 現代の科学的調査によって、ストーンヘンジは、紀元前3050年ごろから紀元前1500年ごろまでに作られた遺跡であることが明らかになっている。紀元1世紀にイギリスに上陸したローマ人の建築ではありえないのであるが、ストーンヘンジを精緻な石造りの建造物の残骸と見るのは、建築家ならではの視点であつただろう。ジョーンズの説はその後支持されず、代わってドルイド教の神殿であつたという説

が強力になる。実地調査とともにこの説を推進したのは、ウィリアム・ストックリー(William Stukeley, 1687-1765)であった。ストックリーは、その著『ストーンヘンジ：ブリテンのドルイドに再建された神殿』(1740)において、ストーンヘンジをドルイド教の祭殿として再建する主張を行った。18世紀前半のストーンヘンジの巨石の状態と、18世紀末では、直立している石の数、石の配置、横石の置かれ方などが異なっているが、これは当時の人々がストックリーの説に従ってストーンヘンジを修復したからである。

ドルイドの人々、またその祭祀集団の教義や文化について、文献として残っているものはない。⁵しかし17世紀以降、ドルイドへの関心は高まり、それはブリテン島の過去の歴史を、ケルト文化の古層まで掘り下げながら、国家の歴史として再創造する情熱と結びついていたという指摘もある(中沢他 53参照)。イギリスには、国家の形成神話と歴史をつなぐ、日本の記紀にあたる文書は存在しない。文字によって歴史が書かれる以前の、神話と事実が交錯するアーサー王の時代の出来事などは、物語や伝承の中に織り込まれ、語り継がれ、様々な歴史的事実と結びついては解釈されることになる。ストーンヘンジがアーサー王と結びつくとき、そこにはサクソン人に対抗したブリトン人の記憶が呼び起こされるが、そのストーンヘンジがドルイドの神殿として蘇るとき、ブリトン人とサクソン人の対立は表面から消えることになるだろう。代わりに近代国家イギリスの裏面を担うかのごとく、ブリテン島に生きた人々の精神的起源としての古代宗教の価値が再考されることになる。

このように18世紀、19世紀は、ストーンヘンジとドルイド教のイメージが強く結びついていった時代であった。ワーズワスの初期作品にはストーンヘンジが登場するが、そのイメージから読みとれるものは、遺跡そのものに関しては当時の人々が一般的に抱いていたものと特別異なるものではない。しかしワーズワスは、この遺跡の一般的なイメージを、戦争の野蛮と社会変動がもたらす悲惨さと融合させることで、独特の表現を試みている。ワーズワスの描くストーンヘンジには、特定の場所とその場所の歴史や伝承が、文学表現によって虚構化されることで、その場所のイメージがさらに強化されることが示されている。

1793年、ワーズワスは友人とともにイギリス西部地方の旅行をしたが、途中友人と別れてソールズベリ平原を徒歩で北上することになった。このときの体験を基にして翌年、翌々年に書かれたのが、「ソールズベリ平原」(Salisbury Plain)である。この作品には、ストーンヘンジのイメージと伝承が、ゴシック的な色彩を帯びて登場する。物語の設定は、見渡す限り荒涼として人影も無

いソールズベリ平原を旅する人物(「彼」)が、同じく平原をさまよう女性と出会い、そこで身の上話を聞くというものである。前半は、夜になって誰もいない「平原の死の家」(“the dead house of the plain,” 1.126)にたどり着いた「彼」が、その場所をめぐらにしていた放浪の女性に出会うまでの状況が、ゴシック的なイメージとともに語られている。最初に描かれるのは、放浪する男が平原の中に声を聞き、その声が語る、炎に照らされたストーンヘンジの石と、兵士の亡霊たちである。

“For oft at dead of night, when dreadful fire
Reveals that powerful circle’s reddening stones,
’Mid priests and spectres grim and idols dire,
Far heard the great flame utters human moans,
Then all is hushed. . .

(11.91-95)⁶

(闇夜にしばしば、恐ろしい炎が／大いなる円になった赤く染まる石を明るみに出し／神官たちや気味悪い亡霊たちや恐ろしい偶像物の中に／遠く大いなる炎が人間のうめき声を発するのが聞こえると／次には全てが静かになる。)

ここで語られる「恐ろしい火」は、具体的に何かの火ではなく、黙示録的で象徴的な火のイメージであろう。ストーンヘンジはここでは、「大いなる円になった赤く染まった石」と書かれているが、その場所が何か重要な場所であり、火とともに血のイメージも連想させる場所であることを示している。神官、幽霊、偶像と登場するが、これらはすべて当時流布していたドルイド教の秘儀にまつわるものと考えられる。そして全てが静かになったかと思うと、

. . . again the desert groans,
A dismal light its farthest bounds illumines,
While warrior specters of gigantic bones,
Forth-issuing from a thousand rifted tombs,
Wheel on their fiery steeds amid the infernal glooms. (11. 95-99)

(再び荒野がうめく。／憂鬱な光ははるか遠くまで光を投げかけ／その間巨大な骨の兵士たちの亡霊が／何千もの裂け目ができた墓から立ち上り／黄泉の国の薄暗がりやを炎の馬に引かせた馬車で行くのだ。)

ワーズワスの描くストーン・ヘンジのヴィジョンには、死んだ兵士の亡霊が満ちている。ここで歴史的な想像力

は平和な世界を現出し、人が人を殺し、殺されていく戦争の記憶が、古代の遺跡からの連想として引き出されている。

このあとで放浪の女は、男が聞いた平原から聞こえる声の語る光景と同じものを、次のように語っている。

And oft a night-fire mounting to the clouds
Reveals the desert and with dismal red
Clothes the black bodies of encircling crowds.
It is the sacrificial altar fed
With living men. (ll. 181-185)

(しばしば鬼火が雲にまで立ち上ると／荒野は憂鬱な赤に染まり／円になった群集の黒い人影を包む。／これは生きた人々が／犠牲として捧げられた祭壇なのだ。)

鬼火の赤のイメージは、生きながら犠牲として祭られた人々の血のイメージと重なっている。円になっている群衆は、当時しばしば絵に描かれた、ストーンヘンジで儀式をおこなうドルイド教の人々を思わせる。⁷

ワーズワスがソールズベリ平原を徒歩旅行したとき、時代はフランス革命のさなかであった。ワーズワス自身革命に共鳴して渡仏したが、帰国を余儀なくされた直後である。フランスには恋人アネットとアネットとの間に生まれた娘を残したままであった。ワーズワスの個人的な生活に大きくのしかかっていた英仏の政治的緊張は、ストーンヘンジの伝承のなかにもその類似物を見出すことができる。アーサー王というブリトン人の王が、侵入するサクソン人を打ち破ったという伝説に、ブリトン島のイギリスと、大陸のフランスとの対立構造のアナロジーを読むことも可能であるし、またサクソン人の血を贖うための石碑であり、同時に秘教的な集団の祭壇である、という複数の伝承の混交から、「生きた人々が／犠牲として捧げられた祭壇なのだ」という詩行のイメージを理解することができるだろう。もっといえば、フランス革命が恐怖政治へと移行する中で、フランスではギロチンが発明され、まさに革命の犠牲として生首が大量生産されていたということもある。ワーズワスは、ストーンヘンジという題材を得て、殺戮を繰り返す人間の業とその恐怖を、古代から現在までをむすぶ想像力によってつなごうとしているのである。

「ソールズベリ平原」は、ワーズワス存命中に出版されることはなかったが、ストーンヘンジの描写については、『序曲』(The Prelude, 1805)で再び登場している。

... and lo, again
The desert visible by dismal flames!
It is the sacrificial altar, fed
With living men-- (Book Twelfth, ll. 329-332)

ワーズワスがソールズベリ平原を実際に歩いてから、彼がどの程度古代への知識を深めたかについては定かではないが、『序曲』(1805)では明確にドルイドの人々に言及し、髭を蓄え白い杖を持つドルイド教の聖者のイメージを登場させている。

Three summer days I roamed, when 'twas my chance
To have before me on the downy plain
Lines, circles, mounts, a mystery of shapes
Such as in many quarters yet survive,
With intricate profusion figuring o'er
The untilled ground (the work, as some divine,
Of infant science, imitative forms
By which the Druids covertly expressed
Their knowledge of the heavens, and imaged forth
The constellations), I was gently charmed,
Albeit with an antiquarian's dream,
And saw the bearded teachers, with white wands
Uplifted, pointing to the starry sky...
(Book Twelfth, ll. 338-350)

(夏の日の日三日、私は歩き回った。そのときたまたま心地よい平原に立つ私の前に、線や、円や、墳墓や、不可思議な形象が現れた。それはあらゆる処いまだ残っており、荒れた地面の上に複雑で豊富なものが描きだされている。(それは生まれたての学問の成した、聖なる模倣的形象であり、それによってドルイドの人々は、密かに彼らの天空の知識をあらわし、星座に思いを馳せたのだが) 私は静かに魅惑された。好古趣味が作り出した夢であるとしても、髭を蓄えた師が、白い杖を持ち上げ、星の輝く空を指しているのを見たのだ。)

語り手の「私」は、平原を彷徨ううちに、古代遺跡のある場所で瞑想し、ヴィジョンの中でドルイドの人々を見る。ここに登場するドルイドの聖者の視覚的イメージは、ストックリーの書物にも登場するもので、一般的に流布していたと考えられる(Piggott, 171-175; Stukeley, 挿画参照)。「ソールズベリ平原」で描かれた血や殺戮のイメージは、『序曲』では後退している。戦争のイメージは、ドルイドの聖者のイメージに取って代わられた形になっている。

ストーンヘンジの現在

17世紀以降巨石遺跡への関心が広がってから、ストーンヘンジは幾度も調査され、発掘されたが、先にも述べたように現代的な考古学的手法による科学的調査の手が入るのは20世紀になってからである。この遺跡が今からおよそ5000年から3000年前に作られたものであることがわかったのは、長い歴史から考えればほんの最近のことである。何のために作られたのかについては現在でも明確な答えはない。一方、科学的な調査や研究とは別に、ワーズワスが描いたストーンヘンジとドルイド教の古代祭祀のイメージの結びつきは、その後も強くイギリス文化の中に息づくことになった。20世紀になってからは、ドルイドを名乗る人々の集団が、ストーンヘンジに集合し、集会をおこなうことが定期的に行われている。⁸ ストーンヘンジが天体の運行と関係するという説とともに、遺跡の場所を天体の力が集結する場所として神聖化する傾向が生まれ、夏至の日に集会が行われるようになったのである。この集会は半ば伝統的なものとなり、2005年6月の夏至の日には、2万人あまりの人々がストーンヘンジに集まり、日の出を待った。⁹

現在、ストーンヘンジは世界文化遺産ということもあって、世界各国から観光客が訪れる、ソールズベリ近郊でもっとも人気の高い観光スポットである。遺跡の保存はイングリッシュ・ヘリテイジが行っており、遺跡に入るには入場料を払い、ガイドをフォーンで聞く。巨石群には直接ふれることはできないようになっている。ナショナル・トラストは周辺地域の土地を所有しそのまま保存することで、遺跡近郊の環境保全に貢献している。

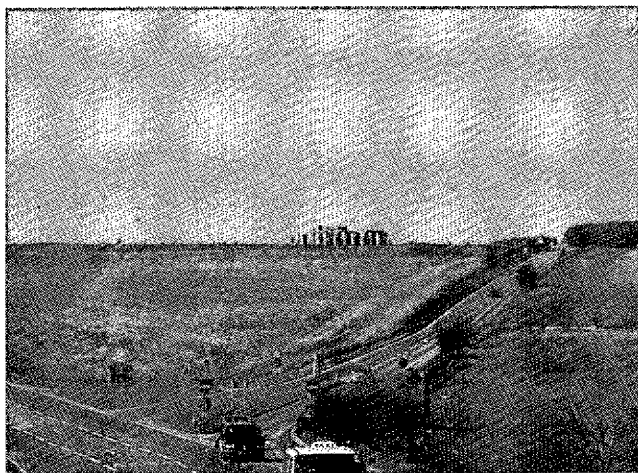


写真2 平原の上に忽然と現れるストーンヘンジの巨石群
(筆者撮影)

ストーンヘンジを集会の場所、神殿として考える現代のドルイドの団体の人々は、これらの遺跡保護の運動と

は全く別に、ストーンヘンジをいつでも自由に入ることの出来る場所として一般に解放するように要請してきた。そして何度も保護団体や警察と衝突する結果になったようである。¹⁰ ドルイドを名乗る人々は、古来この場所が祭壇であったという考えを持っているのであるが、これらの人々と混じって、1970年代から1980年代にかけては、夏至の頃のストーンヘンジ周辺は、若者が何万人もあつまるポップ・フェスティバルの場所となっていた。しかしこれらの参加者達が環境上、治安上、周辺地域に及ぼす被害がはなはだしく、1985年、「ビーンフィールドの戦い」(“the Battle of the Beanfield”)と呼ばれる、警察による強行抑圧が行われた。このあと、集会はしばらく行われなかったようである。ただしここ数年来、集会は平和な状態で復活している。イングリッシュ・ヘリテイジは2000年から、夏至の日に時間を決めて、遺跡に無料で自由に入れるようにはかっている。

正統の宗教ではなく、ケルトの時代までさかのぼるドルイドを名乗る人々の儀式的場所であり、若者達の集会と警察による抑圧が起こった事件の場所であるストーンヘンジは、時には反体制、反権威主義のシンボリックな場所と見なされることもあったようである。後に支配者となるサクソン人を打ち破ったブリテン島の英雄アーサー王が建てたという伝承の場所は、20世紀になってカウンター・カルチャーのトポスとなったわけである。ジェフリー・オブ・モンマス時代から現代まで、ストーンヘンジを取り巻く伝承とイメージには、支配と抑圧、正統と異端など、相反する力が拮抗している。

現在、ストーンヘンジ周辺には、土地の段差を利用して視界に入らない低い場所に2、3の観光客用の商業施設があるのみで、電線などはすべて地下に埋められている。巨石群を見渡す丘陵地帯はすべて見通しの良い草原のまま保存されているが、18世紀から19世紀にかけてしばしば絵画などに描かれた、草原の中に立つストーンヘンジの風景をできるだけ損なわないでおこうという配慮が感じられる。古代の原風景の一つとして強い印象を残すストーンヘンジの、風景としての保存の側面である。この保存の方向は、現在さらに推し進められており、イングリッシュ・ヘリテイジ、ナショナル・トラストおよび道路公団(Highways Agency)は、現在ストーンヘンジに通じる道路(A303, A344 写真2に写っている道路)をトンネルにして道路を視界から隠し、その上を平らな草地にするという10年がかりの計画をたてている。ストーンヘンジの周囲の風景には一切道路が現れないようになるのであるが、同時に遺跡近郊にある施設すべてを3キロ離れた場所に移動させ、そこに観光客用の施設とともに教育施設などを建築する予定である。¹¹

オールド・セーラム (Old Sarum)

オールド・セーラムはソールズベリー(Salisbury)の町の北にある城塞都市の遺跡である。‘Sarum’と‘Salisbury’はもともと同一場所を指す言葉である。教会の移転によって旧セーラムの町はオールド・セーラム(Old Sarum)と呼ばれるようになり、新しい町はソールズベリー(Salisbury)となった。¹²



写真3 外壁の外側(Outer bailey)からみるオールド・セーラムの中心 (筆者撮影)

遺跡のある場所には先史時代から集落があったが、紀元前500年ごろの鉄器時代に、円形に濠を掘った丘の砦(hillfort)が築かれた。ローマ人、サクソン人が次々にこの地に集落を築いたが、サクソン人の時代には現在の外壁の外側まで町が大きく拡張していたという。ヴァイキングの侵入を防ぐために、アルフレッド大王やその後のサクソン人の王は、各地の城砦を補強したが、現在目にするものの出来る深い堀もこの時に補強されたものである。1066年のノルマン征服のあと、ウィリアム征服王(William the Conqueror)は、彼の軍隊をこの地でねぎらい、地主には彼への忠誠を誓わせた。以後、オールド・セーラムは重要な式典を行う場所となり、それと並行して大聖堂の建築が始まり、主教職が設置された。この場所は5つのローマ道(Roman roads)が交差する地点にあるため、交通の要所としても高い利便性があった。10世紀後半から、大聖堂がソールズベリーに移る13世紀初頭までが、オールド・セーラムが行政上の重要な都市としてもっとも栄えた時期となる。

町の隆盛は大聖堂の建築に象徴される。オズモンド主教(在職 1078-99)が、最初に大聖堂を建設し、続くロジャー主教(在職 1107-39)の時代には、大聖堂は大きく拡大され、ヘンリー一世のために宮殿も造られた。現在これらの建築物は、敷石とわずかに石壁が残るだけであるが、

これはおもに後年ソールズベリー大聖堂建立のために建築材として持ち去ったためである。

強い権勢を誇ったロジャー主教が1139年に失脚したあと、町は衰退の道をたどることになる。城の外側の人口の増加に対して、古い城砦を基礎にしたこの町は手狭になっており、また水事情の悪さも不便さを加速させていた。市を開き、人々が暮らすのにより広く便利な場所として、現在のソールズベリーが都市計画に基づいて開拓されることになる。ソールズベリーに大聖堂の建築が始まったのが1220年、升目状に作られ、三分の一を大聖堂の敷地が占めるこの町は、古いセーラムの町の十倍の広さをもつ近代都市の要件を備えたものであった。中世から近世にかけて、ソールズベリーは毛織物取引でにぎわうことになる。

オールド・セーラムは16世紀には全く人の住まない場所となっていた。しかし、単に中世の遺跡として忘れられようとしていたのではない。この町は、城塞都市の面影をすっかりなくしたあとも、行政上の機能をもち続けたからである。オールド・セーラムの選挙区は実質的に住人がいないにもかかわらず、1832年の選挙法改正によって選挙区が廃止されるまで、13世紀から五百年間にわたって国会へ議員を送った。¹³ この事態は古い選挙制度が温存されたことによって起こったものである。オールド・セーラムの選挙区の土地所有者は、票を操作し当選するというを日常的に行っていた。この選挙区は少数の一族のみで構成される「懐中選挙区」(pocket borough)と呼ばれ、実質上の選挙区としての有権者数を持たない「腐敗選挙区」(rotten borough)とも呼ばれた。選挙法改正の機運が高まった19世紀初頭には、この選挙区への非難は一層強まることになる。12世紀に最盛期を迎えその後衰退した町、オールド・セーラムの名は、19世紀になっても、まるで過去の亡霊が生き続けているかのように、現実の政治上の問題とともに語られていたのである。



写真4 城砦の内側から大聖堂跡を望む (筆者撮影)

18世紀後半からロマン主義の時代にかけて、廃墟への関心が高まる中、オールド・セーラムの風景も画家たちの関心を引いてきた。オールド・セーラムのイメージを定着させているのは、ジョン・コンスタブルの描いたオールド・セーラムの風景画であろう。平原の中に残されたかつての城砦跡は、青みがかかったトーンで覆われ、風景の半分は空を覆う雲で構成されている。絵の端には家畜を連れて歩く人の姿が書き込まれている。コンスタブルがオールド・セーラムを描いたのは1830年、画家晩年の時である。選挙法改正の直前であったこの時期、オールド・セーラムの名は腐敗選挙区の代名詞となって人口に膾炙していた。しかしコンスタブルが心を動かされたのは、廃墟を取りまく自然の表情であり、過去の栄光と汚名を背景にしてなお印象深く現前にある風景である。オールド・セーラムの絵の添え書きに、コンスタブルは次のように書いた。

This subject, which seems to embody the words of the poet, 'Paint me a desolation', is one with which the grander phenomena of nature best accord. Sudden and abrupt appearances of light - thunder clouds - wild autumnal evenings - solemn and shadowy twilights 'flinging half an image on the straining sight' - with variously tinted clouds, dark, cold and grey - or ruddy and bright - even conflicts of the elements heighten, if possible, the sentiment which belongs to it. (Leslie, 197)

「僕を憂鬱に描いてくれ」という詩人の言葉を体現しているかのようなこの主題は、自然の大いなる現象ともっとも調和するものなのだ。光が突然急に現れること－雷雲－荒れ模様の秋の夕暮れ－厳かで陰影のあるたそがれが、はりつめた光景に半ば影を放り投げて－暗く、冷たく、灰色の、さまざまな色合いの雲とともに－もしくは赤みがかって明るいものと－これらの要素が拮抗するところに、この風景に対する感情が高まりもするのだ。

オールド・セーラムを眺めるとき、その歴史を知るものにとつて憂鬱な気持ちが沸いたとしても、不思議ではないだろう。かつての繁栄は現在の零落と対比され、後戻りできない歴史の流れへの無力感を引き起こすだろうからである。権力と繁栄を求める人間の営みがすべて無に帰そうとしている光景を前にして、コンスタブルは「自然の大いなる現象と最も調和する」と言う。それはおそらく、画家の技によって、廃墟と化したオールド・セーラムが芸術作品として蘇る過程を考えているからだろう。光と雲とそれらの動きからなる自然の豊潤さを表現した絵画芸術は、コンスタブルにとってはセーラムの繁栄を作り上げた人間の技と対比さ

れるものであったのかもしれない。

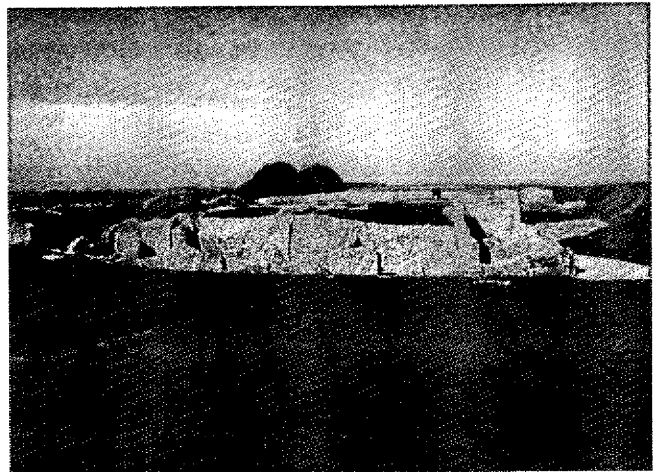


写真5 城砦の上の宮殿跡 (筆者撮影)

晩年のコンスタブルはソールズベリ大聖堂をしばしば描いたが、そこには神聖なシンボルとして虹が書き込まれている。彼がオールド・セーラムに対して抱く感情にも、宗教的な感覚を見ることができる。オールド・セーラムについてコンスタブルは次のように述べた。

Who can visit such a solemn spot, once the most powerful city of the West, and not feel the truth and awfulness of the words of St. Paul: 'Here we have no continuing city!' (Leslie, 198)

(イギリス西部でかつてもっとも勢力のあった街であった、このような厳かな場所を訪ねて、パウロの「ここにわたしたちは永続する都をもっていない」という言葉の、真実と怖ろしさを感じないものがどこにあらうか。)

パウロの言葉とは、ヘブライ人への手紙13章14節にある「わたしたちはこの地上に永続する都をもっておらず、来るべき都をさがし求めているのです」(“For here have we no continuing city, but we seek one to come” Hebrews 13:14, Authorized Version) というところである。この地上にはどこにも永遠に続く都はない、という言葉をも、オールド・セーラムほど如実に示す場所はなかったかもしれない。そして「来るべき都」とは、現実の都市のことというよりは、神の国として人の心に育まれる豊かな場所であろう。コンスタブルにとって「来るべき都」が絵画の中に表現されるものであったとすれば、画家とはその「来るべき都」を追求する者である。パウロはこのように言う。「イエスもまた、御自分の血で民を聖なる者とするために、門の外で苦難に遭われたのです。だから、わたしたちは、イエスが受けられた辱めを担い、宿営の外に出て、そ

のみもとに赴こうではありませんか。」(ヘブライ人への手紙 13:12-13 共同訳) カンスタブルにとってオールド・セーラムの風景は、宗教的心情とあいまって厳かで崇高なものであった。

カンスタブルの生きた時代以後、放牧地として自然のままに放置されていたこの場所は、20世紀初頭から考古学的発掘が行われ、現在目にするこの出来る城壁が掘り起こされた。遺跡の全体は、イングリッシュ・ヘリテイジによって管理されている。オールド・セーラムは、よく整備された遺跡で、城壁や石造りの館の廃墟は補強され、一つ一つに丁寧な案内版がついており、城砦の上からはソールズベリーの町や周辺地域が広く見渡せる。この遺跡で印象的なのは、周囲を二重に囲む堀に、点在するブナの木であり、遺跡全体を覆う緑の草地である。現在地元の保存団体が力をいれているのは、この遺跡の生態系を崩さずに、さまざまな植物や鳥の生育場所として管理することである。植物、動物に関わらず、一つの種が他の種より優勢にならないように、定期的に草を刈り、雑木林を切り倒して木の数を少なくするなどの処置をしている。



写真6 オールド・セーラム内側の壕 ブナの木が点在している (筆者撮影)

オールド・セーラムを管理しているイングリッシュ・ヘリテイジは国庫からの補助によって運営されており、この遺跡近辺には観光客用の商業施設などはなく、かわりにイングリッシュ・ヘリテイジの管理室があった。ナショナル・トラストが「持続可能な観光産業」を強調するのに対して、イングリッシュ・ヘリテイジはイギリスにおける歴史的建造物、古代遺跡、保存地区などの調査研究、および教育上の利用などを行っており、土地計画において歴史的環境が正しく理解されるために政府に提言などを行っている。

エーヴベリー (Avebury)

エーヴベリーの巨石遺跡は、巨大な円形の溝が掘られた中に(henge)、巨石が円形に並べられたもので(stone circle)、遺跡の形状としては、ストーンヘンジや古代のオールド・セーラムと共通するところがある。ストーンヘンジと異なるのは、使われている巨石が自然の状態のままに用いられていることである。ストーン・ヘンジでは、紀元前3050年ごろから始まる第一段階において、円形の土手の周りを取り囲む堀が作られ、紀元前2600年ごろからの第二段階を経て、紀元前2500年から1500年の第三段階で巨石が運び込まれ円形に建てられた。エーヴベリーは、ストーンヘンジの第二段階と重なる紀元前2600年から2100年ごろに作られた遺跡であるが、大きな円周に沿って石が建てられ、その内側に二つのストーン・サークルが作られていたと考えられている。¹⁴

この遺跡はストーン・ヘンジとはことなる歴史をたどった。先史時代の人々がこの場所からいなくなったあとは、7世紀ごろまで、まったく忘れられた場所となっていたが、7世紀以降、サクソン人がこの場所に移住して集落を作りはじめたのである。その後円形の溝の内側にキリスト教会などの集落の中心的建造物が立てられ、12世紀には教会が増築され、異教的信仰は排除されるようになった。この結果、集落の周辺に残っていた石の数々が地中に埋められることになる。異教的な信仰と強く結びついていたと考えられたエーヴベリーの巨石群は、14世紀ごろには半ば地中に埋まったような状態になっていた。



写真7 エーヴベリーの巨石群 (筆者撮影)

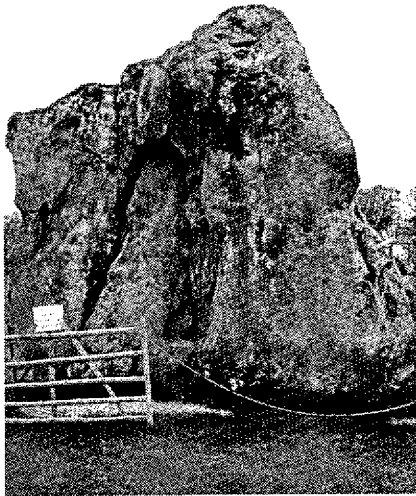


写真8 エーヴベリーの巨石の一つ。
(筆者撮影)

エーヴベリーの集落の人口が増え、遺跡を取り巻く環境が大きく変化しようとしていたとき、この地を訪れ考古学的な研究をしたのが、先にも紹介したウィリアム・ストックリーである。彼は1719年から24年まで調査をしたが、彼の記録によれば、集落の人々は建築用資材として利用するために遺跡の巨石を粉砕していた。多くの石作りの家や教会や壁が、遺跡の石によって建てられていた。ストックリーは、遺跡の石について詳細な記録を残しているが、ストーンヘンジの場合と同じく、この場所をドルイド教の神殿と考えていた。彼はその考えを『エヴリー：ドルイド教の神殿』(1743)に表したが、ストーンヘンジの場合と違ってエーヴベリーがドルイド教のイメージと結びついた文化的な表象とならなかったのは、ひとえに巨石群が集落の人々によって破壊されたり埋められたりしていたことによるだろう。考古学的興味を持つ者にとっては、大きな円形の濠と散在する巨石は魅惑的だったかもしれないが、風景としてのエーヴベリーが人々の想像力を刺激することはなかったのである。航空写真などによって印象付けられる、緑に囲まれた円形の地面を十字に道が通り、片側に集落の屋根が散見する風景は、古代遺跡と中世・近代の町の発展との融合によってできたものである。

エーヴベリーがストーン・サークルを持つ古代遺跡として蘇ったのは、20世紀に入ってからである。20世紀初頭の発掘調査で、この遺跡が新石器時代のものであることが明らかになった。その後、1920年代になって、アレクサンダー・ケーラー(Alexander Keiller, 1889-1955)が、家業のマーマレード会社から得た資金によって、エーヴベリーの土地を買い取り、遺跡発掘と修復の事業にと

りかかることになる。ケーラーの努力によって、地中に埋められていた石の多くが掘り起こされ、地上に建てられた。今日地上に起立している石の多くの部分が、ケーラーによって立て直されたものである。ケーラーはその他多くの発掘事業を行ったが、第二次世界大戦の進行に伴い、自らの発掘事業を中止し、エーヴベリーの管理はナショナル・トラストに委託されることになる。

現在エーヴベリーにある遺跡・文化財と施設は、円形の溝の中の草原に並んだ巨石群と、考古学博物館、および中世期以降に立てられたマナー・ハウスなどである。遺跡の中心部にはバス停があり、その周りには観光客用の商店、レストランが2、3ある。ナショナル・トラストは、目標とする「持続可能な観光産業」(Sustainable tourism)を支える要件として、1) 地域の特性を生かす 2) よりよい公共交通機関を提供する 3) 地域経済を支える 4) 教育的要素を充実させる 5) 環境を支える 6) 人の流れを管理するなどを挙げている。¹⁵ これらの視点から見れば、考古学的な要素はこの遺跡の大きな特徴としてより強調していく余地のあるものであろう。実際には博物館の展示物が少なく、歴史的な説明もあまり充実していなかったのが残念であった。また、巨石群の広がる草原を、観光および教育資源として利用する道をさぐる必要もあるだろう。公共交通機関としてはバスしかないが、バスの便は非常に少ない。

まとめ

以上、ソールズベリ平原にある遺跡、ストーンヘンジ、オールド・セーラムについて、ワーズワス、カンスタブルの作品などととも考察し、エーヴベリーについても紹介した。ストーンヘンジは日本でもよく紹介されているが、オールド・セーラムやエーヴベリーは、日本語の案内書も少ないため、あまり知られることがないと思われる。ソールズベリ平原の遺跡を通して、イギリスにおける文化的堆積のありかたの一つを試論した。

ワーズワスやカンスタブルの作品を考えるにあたって、彼らの時代においては、ストーンヘンジがドルイド教と強く結びついていたこと、また、オールド・セーラムはすでに廃墟となりながら行政区として機能していたことなどを考察した。作品と作品に登場する遺跡の双方を歴史的な視野からとらえることで、時代の文化的な様相が明らかになったと考える。それと同時に、ワーズワスの描いたストーンヘンジと殺戮のイメージの連想は、彼独自の時代とのかかわりから生み出されていると考えられること、またカンスタブルがオールド・セーラムについて語るところには、絵画として歴史的な重みのある主題

を昇華し、光と雲との描写に凝縮しようとする意図が見られることが明らかになった。これらの点は、ワーズワスとカンスタブルが芸術的表現を意図するところに現れた独創的な点である。

今回取り上げた遺跡については、すべて20世紀に入ってから以降の、現在までの状況を概観したが、近年の動向を理解するためにも、これらの遺跡の歴史とともに、これらの遺跡がどのような文化象徴としてイギリス文化の中で機能してきたかをよく理解する必要があることが明らかになったと考える。ロマン主義時代にはすでに高まっていた古代への関心は、形を変えて現在も生きている。ストーンヘンジにおいては、ドルイドを名乗る人々を次々に現出させたこと、そして夏至の日の集会在定着していることなどを考えれば、この遺跡がもつ喚起力が歴史的な重みも手伝っていまだに強いことを知らされる。オールド・セーラムにおいては、イギリスを代表する画家の一人であるカンスタブルの絵画を通して、その風景のイメージは消費社会のアイテムの一つとなるほどに流布している。実際の遺跡のオールド・セーラムは、イングリッシュ・ヘリテージにより古代から中世の遺跡の保存の見本のごとく整備、管理され、野鳥の飛び交う自然の野として静かなたたずまいを見せている。エーヴベリーについては、ストーンヘンジと年代は比較的近いが、廃墟を含んだ風景への趣味が一般化していく18世紀には巨石の多くが地中に埋められたため、風景としての喚起力を発揮することがなかった。エーヴベリーで興味深いのは、実業家でもあるケーラーが私費を投じて考古学的研究を行った場所であることである。ケーラーの考古学は、イギリスの良質なアマチュアリズムの一つであろうが、19世紀から20世紀にかけて多く見られたこのような学問的探究の発現を広く文化的文脈でとらえることも可能であろう。

本研究の一部は、兵庫県立大学特別教育研究助成金(平成15年度 海外渡航)による調査によって行われた。

注

- 1 'romantic'の定義として、OEDは、"Of a narrative etc.: having the nature or qualities of romance in form or content"としている。
- 2 OEDでは、名詞の'stone'に'henge'の語源である'hang'がついたものだろうとしている。'henge'とは、18世紀には吊り下げられた石の意があった。OEDによる'Stonehenge'の定義は、"A large megalithic monument on Salisbury Plain in Wiltshire, England, including several concentric stone circles of various ages, a similar structure elsewhere."

である。

- 3 Geoffrey of Monmouth, 196-197を参照のこと。ジェフリー・オブ・モンマスのラテン語による*History of the Kings of Britain*は、およそ1136年に完成した。アーサー王の物語も含んだブリテン人の歴史を書いたこの書物は、史実としての信憑性とは別に、後世に多大な影響を与えた。
- 4 ストーンヘンジに関する言説およびケルト文化については、中沢他『ケルトの宗教 ドルイディズム』61-71を参考にした。
- 5 ドルイドに関する記述は、ギリシャ、ローマの古代文献に散見するのみである。中沢他『ケルトの宗教 ドルイディズム』参照。OEDには、'Druid'は次のように定義されている。"A number of an order of priests and teachers among the Celts of ancient Gaul, Britain, and Ireland, later reputed to be magicians and soothsayers."
- 6 以下、ワーズワスの詩のテキストは、*The Salisbury Plain Poems of William Wordsworth*および*The Prelude: 1799, 1805, 1850*である。
- 7 ドルイド教の神殿としてのストーンヘンジの絵画におけるイメージは、Stukeley および Chippindale, 87参照。
- 8 例えば、1781年に秘密結社として創設されたThe Ancient Order of Druidsは、20世紀には友愛と奉仕を目的とする団体に変貌していたが、彼らは1905年に初めてストーンヘンジにおいて公式の集会を行った。ドルイドに関わる団体、およびその他集会についての詳細は、Chippindale, 172-175, 252-263および中沢他 14-16参照。
- 9 詳細は、"Thousands celebrate solstice at Stonehenge." *Guardian Unlimited*. Tuesday June 21, を参照。
- 10 現代のドルイドの団体、およびストーンヘンジにおける集会については、Greywolf, aka Phillip Shallcross. "Stonehenge and the Druids." に詳しい。
- 11 このトンネル設置計画には、トンネルが短すぎて保護地域の環境に害が出る恐れがある、交通量のさらなる増加が懸念されるなどの理由で反対意見も出されていた。政府はトンネル化の計画を支持し、経済支援を行ってきたが、大幅なコスト増のため、2005年7月20日にトンネル計画の見直しを発表。現在は代替案の検討に入っている。"Government to review Stonehenge road tunnel." July 20 2005. Friends of the Earth, Press release. および "Stonehenge road tunnel is stalled." *Guardian Unlimited*. Thursday July 21, 2005. を参考のこと。
- 12 オールドセーラムについては、主に Renn, *Old Sarum*を参考にした。
- 13 1832年の第一次選挙法改正では、オールド・セーラムだけではなく、他に多くの腐敗選挙区が廃止された。
- 14 エーヴベリーについては、主にMalone, *The Prehistoric Monuments of Avebury*を参考にした。
- 15 National Trust, "Tourism: Policy from Practice"より。

参考文献

- Chippindale, Christopher. *Stonehenge Complete*. Ithaca: Cornell University Press, 1983.
- Corbishley, Mike, et al. *Prehistory*. London: English Heritage, 2000.
- Geoffrey of Monmouth. *The History of the Kings of Britain*. Trans. Lewis Thorpe. Harmondsworth: Penguin Books,

- 1966.
- "Government to review Stonehenge road tunnel." July 20 2005. Friends of the Earth, Press release. 20 Sep. 2005. http://www.foe.co.uk/resource/press_releases/government_to_review_stone_20072005.html
- Greywolf, aka Phillip Shallcrass. "Stonehenge and the Druids." 25 Sep. 2005 http://www.druidorder.demon.co.uk/druids_stonehenge.htm
- Jones, Inigo. *Most Notable Antiquity of Great Britain Vulgarly Called Stone Henge on Salisbury Plain*. 1655. Kessinger Publishing, n.d.
- Leslie, C. R. *Memoirs of the Life of John Constable*. 1845; London: Phaidon Press, 1951.
- Malone, Caroline. *The Prehistoric Monuments of Avebury*. London: English Heritage, 1994
- National Trust, "Tourism: Policy from Practice." 29 Sep. 2005. http://www.nationaltrust.org.uk/main/w-ourism_policy_from_practice.pdf
- Piggott, Stuart. *The Druids*. New York: Thames & Hudson, 1968.
- Renn, Derek. *Old Sarum*. London: English Heritage, 1994.
- "Stonehenge road tunnel is stalled." *Guardian Unlimited*. Thursday July 21, 2005. http://www.guardian.co.uk/uk_news/story/0,,1532745,00.html
- Stukeley, William. *Stonehenge: A Temple Restor'd to the British Druids and Abury: A Temple of the British Druids*. Introd. Robert D. Richardson, 1740; New York: Garland Publishing, 1984.
- "Thousands celebrate solstice at Stonehenge." *Guardian Unlimited*. Tuesday June 21, 2005. 25 Sep. 2005. <http://www.guardian.co.uk/britain/article/0,,1511179,00.html>
- Welsford, Enid. *Salisbury Plain: A Study in the Development of Wordsworth's Mind and Art*. Oxford: Basil Blackwell, 1966.
- Wordsworth, William. *The Salisbury Plain Poems of William Wordsworth*. Ed. Stephen Gill. Ithaca: Cornell University Press, 1975.
- . *The Prelude: 1799, 1805, 1850*. Ed. Jonathan Wordsworth et. al. Norton Critical Edition. New York: W. W. Norton, 1979.
- 中沢新一 鶴岡真弓 月川和雄 (編著)『ケルトの宗教 ドルイディズム』東京 岩波書店 1997年

(平成17年10月3日受付)